

# 地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義 —地域住民の思いと効果—

玉田雅美, 澁谷 幸, 池田清子, 岩本里織, 高田昌代

神戸市看護大学

キーワード：模擬患者（SP）、地域住民ボランティア、看護技術演習、質的記述的方法

## The Significance of a Nursing Care Training with the Participation of Community Resident Volunteers —Effect and Thought of Community Residents—

Masami TAMADA, Miyuki SHIBUTANI, Sugako IKEDA, Saori IWAMOTO,  
Masayo TAKADA

Kobe City College of Nursing

Key words : simulated patients(SP), community resident volunteer, nursing care training , qualitative descriptive method

### 要旨

本研究の目的は、看護技術演習に患者役として参加した地域住民ボランティアが抱いた思いと参加による効果を明らかにすることであった。研究参加者は、技術演習に参加経験のある地域住民ボランティア11名（男7名女4名、平均年齢70.5歳）で、参加した感想について半構造的インタビューを行い、質的記述的に分析した。

その結果、参加動機としては7サブカテゴリー、5カテゴリーが、演習に参加するメリットとしては5サブカテゴリー、3カテゴリーが抽出された。さらに参加して抱いた思いとしては10サブカテゴリー、4カテゴリーが、今後の技術演習への意見としては7サブカテゴリー、4カテゴリーが抽出された。

参加動機は、【看護教育への関心】【看護師養成への貢献】【自由な時間の有効活用】【自分の健康への関心】【社会とのつながりや貢献】であった。技術演習に参加するメリットは、【看護への理解の深まり】【日常生活に活用できる知識の獲得】【学生との交流による活性化】であり、自分達の暮らしやすさに役立つ知識を得、看護活動への理解深化の機会になっていた。看護技術演習に参加して抱いた思いは【学生はまじめでおとなしい印象】【学生のふるまいに対する違和感】【学習に役立つ患者役になる難しさ】【学生を見守り育てようとする気持ち】であった。また、今後の技術演習への意見としては【教育活動としての情報がほしい】【患者役として自分を投じたい】【抵抗を感じる役割がある】【教育活動発展への提案】が抽出され、自分自身を活用し、リアリティのある患者として学生の学習効果を向上させようとしていた。

以上の結果から、地域住民参加型看護技術演習は、学生に対しては、リアリティのある患者と人間的なふれあいのある学習経験を提供できる教育方法であり、参加する地域住民にとっては、看護への理解を深化させ、看護サービスを見極める目を養う機会を提供する可能性が示唆された。

### I. はじめに

近年、模擬患者（Simulated Patients：以下 SP とする）を導入した看護教育方法が広がりつつあり、技術習得を目的とした授業科目では、リアリティや安全性、再現性、反復性のある学習環境が実現できる教育方法として期待されている。看護教育における SP 参加型教育は、2000年代初めには取り入れられ、2005年頃か

らは標準化された SP 養成が行われるようになった（原島ら、2012）。また、SP 参加型教育には、学生がリアリティと適度な緊張感を体験し、学習意欲が高まるとともに患者の視点からフィードバックが得られる等の利点があると言われている（本田、2009）。これら SP 参加型教育実践や学生に及ぼす効果については、これまでに多数報告されているものの、SP を導入するには事前準備にかかる時間、労力や費用などの課題

があり、教育効果が高いとは言え、たやすく導入できる教育方法ではないことも指摘されている（本田，2009；原島，2012）。

神戸市看護大学（以下、本学とする）においては、2006年度に採択された現代 GP プログラム「地域住民とともに学び創る健康生活」の一環として、地域住民が教育ボランティアとして参加する授業を導入している。本学で、地域住民ボランティア（以下、ボランティアとする）が参加する教育活動は多岐にわたっている。具体的には、看護技術演習における患者役、健康教育での受講者、高齢者としての体験や子育て体験を学生に語る講師などである。このような授業を体験した学生は、SP による授業効果として一般的に報告されている「リアリティ」による学習効果だけではなく、ボランティアによるエンパワーや、ボランティアとかかわることで生じる対象への思いなど多様な学びがみられる（江川ら，2011）。

一方、SP を導入した医療者教育は、学習者である看護学生や医学生に及ぼす効果だけではなく、患者-医療者関係や患者の声を反映させた医療の実現、SP となる人自身の医療への理解深化など、様々な効果が期待できるとの報告もなされている（大滝，1993）。本学のこれまでの実践においても、ボランティアから「自分の健康づくりに役に立ちそう」「学生さんの役に立てることが嬉しい」などの感想を聞く事があり、健康増進や生きがいにつながっていることが伺える。SP に焦点を当てた看護教育研究においては、SP が参加することによる授業改善への可能性や SP として参加した地域住民の健康教育の機会になっていることが報告されている（阿部ら，2012）。しかし、この研究は授業に参加する SP の経験に焦点を当てたものではない。SP の経験については、庄村ら（2010）によって、自分自身の励みや成長、SP としての困惑、SP 教育の改善のための取り組み、看護学生への願いがあることが報告されている。しかし、この研究は成人看護学における事例演習での経験あり、どのような内容で演習が実施されたのかは記載されていない。つまり、先行研究においては、看護技術演習に参加する SP 自身の思いや効果については十分に明らかにされていないと言える。

SP を看護学教育に導入するには、まだいくつかの課題が残されているが、看護技術演習に患者役として参加した本学のボランティア自身への効果が明確にな

ることは、この教育方法を導入するにあたっての課題を乗り越える意義を明確にするものと思われる。さらに、看護系大学が果たす地域貢献のひとつのあり方として提案できるものと考ええる。

そこで、本研究では、看護技術演習に患者役として参加した地域住民ボランティアが抱いた思いと参加による効果を明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 研究参加者

本学においてボランティアとして登録している地域住民で、2009～2010年の看護技術演習に患者役として参加経験のある人を研究参加候補者とし、面接依頼書を郵送した。依頼内容に同意し、返信のあった11名を研究参加者とした。

### 2. 本学のボランティアについて

ボランティアとは、大学が近隣住民に対して行った募集に対して、自主的に応募、登録している者である。登録者には、毎年年度初めに年間授業予定と各授業でのボランティア内容を案内し、その中から協力可能な授業に参加してもらっている。募集の際の参加条件は特に設けられていない。

看護技術演習では、学生12～13名のグループに対して1名のボランティアが患者役として参加している。授業は、グループの代表学生が行う看護援助（10～15分）を受け、その後、グループ学生全員と意見交換を行うという流れで進める。参加するボランティアに対しては、演習内容に応じて教員が作成した患者役の設定とシナリオを予め郵送しておき、演習当日に30分程度の教員との打ち合わせを行うが、特別な講習会やトレーニングは行っておらず全員が無償での参加である。

### 3. データ収集期間：2012年7月～2012年9月

### 4. データ収集方法

ボランティアへの参加動機、看護技術演習にボランティアとして参加した感想、ボランティアを活用した看護技術演習への提案などについて半構造的インタビューを行った。インタビューはプライバシーが確保でき、参加者が自由に語ることができる場所で1人60分程度行った。また、その内容は許可を得て録音した。

## 5. データ分析方法

逐語録を作成し、データの意味内容の類似性、相違性を検討しサブカテゴリー、カテゴリーを抽出する質的記述的方法を用いた。分析結果の厳密性は、分析過程において研究者間でディスカッションを行い検討することで確保した。

## 6. 倫理的配慮

本研究の参加者は、本学の授業に参加しているボランティアであるため、心理的な圧迫感や義務感を感じることなく、自由に意思決定ができるように、郵送にて協力依頼を行い、返信用封筒で自由に返信することができるように配慮した。

また、研究目的・方法、研究参加の自由、匿名性の保持、結果の公表等について文書および口頭で説明し、書面で同意を得た。本研究は、神戸市看護大学倫理委員会の承認を得て実施した。

# III. 結果

## 1. 研究参加者の概要

研究参加者は、男性7名女性4名で、平均年齢は70.5歳であった。参加者の看護技術演習への参加経験回数は1～5回であり、演習内容は、バイタルサインズの測定、足浴、寝衣交換、温罨法、食事介助、床上排泄であった。

## 2. ボランティアの経験

分析の結果、参加者の語りから、29サブカテゴリー、16カテゴリーが抽出され、それらは4つのテーマ（ボランティアの参加動機・演習に参加するメリット・ボランティアに参加して抱いた思い・今後の技術演習への意見）に分類された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>で示す。また、サブカテゴリーを導き出すことになったコードを「」で示す。

### 1) ボランティアの参加動機（表1）

参加動機としては、【看護教育への関心】【看護師養成への貢献】【自由な時間の有効活用】【自分の健康への関心】【社会とのつながりや貢献】の5カテゴリーが抽出された。

【看護教育への関心】は、<看護教育への関心>の1サブカテゴリーからなる。「理論に基づいて動く看護師と感情で動く看護師がいるが、看護大学ではどういう教育がされているのか」など、自分自身がこれまで目にした看護師の姿から感じた率直な看護教育への疑問から、本大学の教育に興味をもって参加しているボランティアがいた。

【看護師養成への貢献】は、<良い看護師を育てることへの貢献><患者体験に基づく看護師への期待と恩返し>の2サブカテゴリーからなる。「看護教育には人と接することが必要」なので、高齢である自分なら貢献できるという思いや、自分自身が看護師に「お世話になった」ため、看護師養成に役に立ちたい「看

表1 ボランティアの参加動機

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（代表例）
看護教育への関心	看護教育への関心	・病院には、理論に基づいて動く看護師と感情で動く看護師がいるが、看護大学ではどういう教育がされているのか興味があった
看護師養成への貢献	良い看護師を育てることへの貢献	・看護教育には人と接することが必要であり、教育ボランティアはその為に役に立つ ・昔お世話になったすばらしい看護師さんようになってほしいと思った
	患者体験に基づく看護師への期待と恩返し	・お世話になった看護師に恩返ししたい ・看護師のお世話になってきた自分の体験は学生の役に立つと思った
自由な時間の有効活用	自由な時間の有効活用	・家に居ても仕事がないから
自分の健康への関心	自分の健康への関心	・高齢者であり、健康に関心を持つ必要があるから ・健康についてのメリットを期待して
社会とのつながりや貢献	社会貢献	・地域の大学なので参加するのが当たり前
	社会との交流	・社会とつながっていたい

看護師に恩返ししたい」という思いが語られた。

【自由な時間の有効活用】は、＜自由な時間の有効活用＞の1サブカテゴリーからなる。ボランティアは多くが高齢者、無職であるため、＜自由な時間の有効活用＞をしたいと感じていた。

【自分の健康への関心】は＜自分の健康への関心＞の1サブカテゴリーからなる。「高齢者であり、健康に関心を持つ必要がある」と考え、「健康についてのメリットを期待して」参加していた。

【社会とのつながりや貢献】は、＜社会貢献＞＜社会との交流＞の2サブカテゴリーからなる。自分たちの住む地域の大学に役立ちたいという思いや、「社会とつながっていたい」という考えを持っていた。

## 2) 看護技術演習に参加するボランティアのメリット (表2)

演習に参加するメリットとして、【看護への理解の深まり】【日常生活に活用できる知識の獲得】【学生との交流による活性化】の3カテゴリーが抽出された。

【看護への理解の深まり】は、＜看護師になるための学習内容の理解＞＜看護師の意図の理解＞の2サブカテゴリーからなる。ボランティアの中には、これまで看護師と会話をした経験が少ないことから、「看護師は点滴交換を行うだけの人」と思っていた人もいた。しかし、このようなボランティアも演習に参加して、学生が様々なケアを学んでいることを知り、看護師の仕事に対する見方が間違っていたことに気づいていた。

また、バイタルサインズ測定では、測定手技だけではなく「正確なデータを取る必要性を学ぶ学習」であると認識するようになったなど、＜看護師になるための学習内容の理解＞ができるようになっていた。さらには、「自分が入院した時に看護師さんがしていることの意味がわかって良かった」と、＜看護師の意図の理解＞をしていた。

【日常生活に活用できる知識の獲得】は、＜ケアや病気についての知識の獲得＞＜看護技術の日常生活への活用＞の2サブカテゴリーからなる。ボランティアのうちの数人は、設定した患者の病気について自分で調べた上で授業に参加していた。これらのボランティアは、「病気について調べることで知識が増える」と、授業に参加するメリットとして語っていた。また、患者としての経験のない援助を受けることで「実際の患者になった時の練習になる」「介護が必要になった時の役に立つ」など、演習に参加することで＜ケアや病気についての知識の獲得＞ができ、将来の自分の役に立つと感じていた。また、演習で学生が行ったように「足のマッサージも兼ねて指の間も洗った」り、「痛い方の足からズボンを履くようになった」りと、演習で学生が学んでいた＜看護技術の日常生活への活用＞がなされている様子がうかがえた。

【学生との交流による活性化】は、＜学生との交流による活性化＞の1サブカテゴリーからなる。自分たちとは違う若い世代の学生と交流することで、自分自身もエネルギーをもらっていると語られた。

表2 看護技術演習に参加するボランティアのメリット

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (代表例)
看護への理解の深まり	看護師になるための学習内容の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師は点滴交換を行うだけの人ではなくて、色々な勉強をしておられるのだとわかった</li> <li>・(バイタルサインズ測定は) 正確なデータを取る必要性を学ぶ学習なんだとわかった</li> </ul>
	看護師の意図の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が入院した時に看護師さんがしていることの意味がわかってよかった。</li> <li>・今後入院した時に、看護師の意図がわかるので、もっと看護師に協力してやりやすくていいかなと思う</li> </ul>
日常生活に活用できる知識の獲得	ケアや病気についての知識の獲得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病気について調べることで知識が増える</li> <li>・実際の患者になった時の練習になる</li> <li>・介護が必要になった時の役に立つ</li> </ul>
	看護技術の日常生活への活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足のマッサージも兼ねて指の間も洗っている</li> <li>・痛い方の足からズボンを履くようになった</li> </ul>
学生との交流による活性化	学生との交流による活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若い学生と関わることでエネルギーがもらえる</li> <li>・若者との交流ができる</li> </ul>



## 3) 看護技術演習に参加して抱いた思い(表3)

ボランティアが、看護技術演習に参加して抱いた思いとして、【学生はまじめでおとなしい印象】【学生のふるまいに対する違和感】【学習に役立つ患者役になる難しさ】【学生を見守り育てようとする気持ち】の4カテゴリーが抽出された。

【学生はまじめでおとなしい印象】は、＜まじめで一生懸命な姿に感心する＞＜おとなしい印象を受ける＞の2サブカテゴリーからなる。ボランティアは、援助を行う学生だけでなく、その様子を見ている学生も互いに「的確にアドバイスでき」ていたり、「まじめ」で「一生懸命」な姿を見て感心する一方で、意見を言わない学生に対しては＜おとなしい印象を受け＞ていた。

【学生のふるまいに対する違和感】は、＜学生の行動についての違和感＞＜援助の不自然さ・未熟さ＞の2サブカテゴリーからなる。一つ一つの動作に「ごめ

んなさい」「失礼します」と言う学生から援助を受けたボランティアは、＜学生の行動についての違和感＞を感じていた。また、男性のボランティアは、尿器を使った排泄援助の際に、男子学生からトイレトペーパーを渡され、「男性なのに、どう使えばよいのか」と戸惑いを感じていた。他にも、「血圧測定できない学生を見て不安に思った」などと、＜援助の不自然さ・未熟さ＞を感じたことが語られた。

【学習に役立つ患者役になる難しさ】は、＜患者役になる難しさ＞＜学習に役立っているのかという不安＞＜指導にかかわることの難しさ＞の3サブカテゴリーからなる。ボランティアの中には、病気体験・患者経験の少なさや、疾患理解の乏しさなど＜患者役になる難しさ＞を感じている人がいた。また、「的確な意見が言えているのか」「上手に演技できた自信がない」という思いから、ボランティアとして＜学習に役立っているのかという不安＞があると感じている人も

表3 看護技術演習に参加して抱いた思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード(代表例)
学生はまじめでおとなしい印象	まじめで一生懸命な姿に感心する	・学生同士で的確にアドバイスできることに感心 ・学生は熱心・まじめ・一生懸命
	おとなしい印象を受ける	・自分の意見を言う学生が少ない
学生のふるまいに対する違和感	学生の行動についての違和感	・「ごめんなさい」「失礼します」をいちいち言うのは変
	援助の不自然さ・未熟さ	・本当の排泄援助だったらとても間に合わない ・男性(患者)なのに、尿器での排泄援助の際にトイレトペーパーを渡されて困った ・血圧測定できない学生を見て不安に思った ・勉強不足の態度に驚く
学習に役立つ患者役になる難しさ	患者役になる難しさ	・患者経験が少ないから患者のイメージができなくて困った ・患者役がどの程度話してよいか分からない ・病気の知識がなく十分な対応ができなかった
	学習に役立っているのかという不安	・的確な意見が言えているのか不安 ・上手に演技できた自信がない ・ボランティアとして役に立っているのか
	指導にかかわることの難しさ	・学生に対して素人が教えるのは難しい ・学生を傷つけていないか心配
学生を見守り育てようとする気持ち	学生にかかわる時の姿勢・考え方	・学生が社会でいろいろな人・場面に対応できるように意図的にかかわろうと思う ・他のボランティアとは違う観点から意見を言いたい ・看護師になる学生を応援する思いで接している
	学生を許容する気持ち	・学生だから上手にできないのは当たり前だ ・学生だからできなくても大丈夫
	学生の学習に貢献したい気持ち	・自分が恥ずかしいことよりも学生に学ばせたい ・若い学生の学びに貢献しているという意識 ・現実の自分の姿を見て患者の生活の歴史を感じてほしい

いた。さらに、「素人が教えるのは難しい」「学生を傷つけていないか心配」など、＜指導にかかわることの難しさ＞も語られていた。

【学生を見守り育てようとする気持ち】は、＜学生にかかわる時の姿勢・考え方＞＜学生を許容する気持ち＞＜学生の学習に貢献したい気持ち＞の3サブカテゴリーからなる。

参加者は、各自が教育ボランティアとしてどのように学生にかかわれば学生の学びにつながるのかを考えており、「社会でいろいろな人・場面に対応できるように意図的にかかわろうと思う」「他のボランティアとは違う観点から意見を言いたい」「学生を応援する」といったような＜学生にかかわる時の姿勢・考え方＞を持っていると語った。そして、演習時には学生の技術や対応の未熟さを感じても、「学生だから上手にできないのは当たり前」と＜学生を許容する気持ち＞を持って学生に接していた。また、「自分が恥ずかしいことよりも学生に学ばせたい」「現実の自分の姿を見て患者の生活の歴史を感じてほしい」といった自分のことよりも学生の学びを優先した＜学生の学習に貢献したい気持ち＞が語られた。

#### 4) ボランティアを活用した今後の看護技術演習への意見（表4）

ボランティアを活用した今後の技術演習への意見として、【教育活動としての情報がほしい】【患者役として自分を投じたい】【抵抗を感じる役割がある】【教育活動発展への提案】の4カテゴリーが抽出された。

【教育活動としての情報がほしい】は、＜学生についての情報提供の要望＞＜状況設定についての情報提供の要望＞の2サブカテゴリーからなる。＜学生についての情報提供の要望＞については、学生の学年や授業内容については簡単に説明を受けているが、学生の準備状態や教育の目的・意図が分からないことがあげられた。＜状況設定についての情報提供の要望＞については、「これまで通りシナリオがある方がいい」「病気についての知識がほしい」などがあげられた。

【患者役として自分を投じたい】は、＜生身の自分を活用してほしい＞＜肌を露出する患者役を受け入れる気持ち＞の2サブカテゴリーからなる。ボランティアは「（モデル）人形で行うのと同じ内容では（ボランティアが行う）意味がない」と感じており、「歳とった体も、それが本当の事実であり、それが学生をより真剣にさせる」「自分の病気体験をそのまま活用できるような患者役がしたい」と、＜生身の自分を活用してほしい＞という意見を持っていた。また、ボランティアの羞恥心を気遣うよりも「できるだけ実際の患者に

表4 ボランティアを活用した今後の看護技術演習への意見

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（代表例）
教育活動としての情報がほしい	学生についての情報提供の要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生にどう教育していくかについての情報が欲しい</li> <li>・学生の準備状況や授業の目的が分かるという</li> </ul>
	状況設定についての情報提供の要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで通りシナリオがある方がいい</li> <li>・病気についての知識がほしい</li> </ul>
患者役として自分を投じたい	生身の自分を活用してほしい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人形で行うのと同じ内容では意味がない</li> <li>・できるだけ実際の患者に近い状態の方が役立っている感じがする</li> <li>・歳とった体も、それが本当の事実であり、それが学生をより真剣にさせる</li> <li>・今後は、自分の病気体験をそのまま活用できるような患者役がしたい</li> </ul>
	肌を露出する患者役を受け入れる気持ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者役で肌を出すのは大丈夫</li> <li>・下着姿になるのは問題ない</li> </ul>
抵抗を感じる役割がある	抵抗を感じる役割がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>・排泄ケアの患者役は抵抗がある</li> <li>・学生に汚い足だと思われるかもしれないので、足は見せたくない</li> </ul>
教育活動発展への提案	より効果的な授業方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアと学生の話し合う機会があればいい</li> <li>・人への対応を学べる場を一緒に作る必要がある</li> </ul>
	教員へのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアに気を遣うのは教員の負担を増やすだけである</li> <li>・ボランティアに気を遣わず必要なことは要求していく方がよい</li> </ul>

近い状態の方が役立っている感じがする」と患者の実際に近づくことを優先する発言が見られ、女性を含めて大半が＜肌を露出する患者役を受け入れる気持ち＞を持っていた。

【抵抗を感じる役割がある】は、＜抵抗を感じる役割がある＞の1サブカテゴリーからなる。「排泄ケアの患者役は抵抗がある」「汚い足だと思われるかもしれないので、足は見せたくない」等、患者役の中でも、【抵抗を感じる役割がある】と語られた。

【教育活動発展への提案】は、＜より効果的な授業方法＞＜教員へのアドバイス＞の2サブカテゴリーからなる。＜より効果的な授業方法＞としては、「ボランティアと学生の話し合う機会があればよい」「人への対応を学べる場を一緒に作る必要がある」という意見があった。また、「ボランティアに気を遣うのは教員の負担を増やすだけである」ため、「気を遣わず（教育・授業に）必要なことは要求していく方がよい」という＜教員へのアドバイス＞も語られた。

#### IV. 考察

##### 1. 地域住民（ボランティア）がSPとなる事の意義

一般的にSPにはSimulated Patient（模擬患者）とStandardized Patient（標準模擬患者）の2通りの意味があり、学習者の教育目的により区別されている。前者は練習の場に参加するSPで、主な役割は医療面接での演技と演技終了後に学習者に伝えるフィードバックである。後者は学習者の試験に参加するSPであり、演技や評価を標準化された患者である。医療系大学ではOSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）や進級試験、卒業試験等で活用されている（阿部，2011）。本学の地域住民ボランティアは、前者のSimulated Patient（模擬患者）に近いが、特別なトレーニングは受けていないという特徴がある。

しかしながら、本学のボランティアは【学生のふるまいに対する違和感】を感じながらも【学生を見守り育てようとする気持ち】を持っているなど、教育者として学習者にかかわる準備性を有していると思われる。これは、今回参加したボランティアのほとんどが様々な経験を重ねて生きてきた高齢者であることによると考える。ボランティアの多くは、人生の先輩として自分ができることを考え、これから看護師として育ていく学生を応援する気持ちを持ちながら、どのように

かかわると学生のよい学びにつながるのかを試行錯誤している。その姿は職業SPに劣らない、あるいは職業SP以上に、学習者への愛情に基づいた教育者としての姿勢であると思われる。このようなボランティアが技術演習に参加することで、学生は身近な方に支えられているという安心感のもとに、「演じる」ことによって作られた患者ではなく、ありのままの「ひと」としての患者の姿に触れて学ぶという体験ができるのではないかと考える。

SP団体に所属し研修を重ねているSPに依頼することは、学生に高い満足感と臨場感を提供できるため、模擬患者は一定の訓練を受けた者を活用することが教育効果を高める上で重要であると言われる（鈴木ら，2002；原島，2012）。本研究の結果でも、ボランティアは【学習に役立つ患者役になる難しさ】を感じていた。しかし、技術演習の患者役としては、設定された「患者」として上手に演技することや、学生に気付きを促すようなフィードバックができることが、必ずしも第一義的ではないと考える。患者役として学生に的確に意見を伝えられないといったボランティアの姿は、要望があっても看護師に言えない患者の姿と類似している。そういった患者と看護師の普通のかかわりの中で生じる遠慮や言いづらさなどを含んだダイナミックな人間関係の基盤の上にケアが成立していることや、そのような患者の思いを汲み取りながら、ケアが実施される看護の実際こそが、本来技術演習において学生に最も学んでほしい内容でもある。

また、ボランティアからは【患者役として自分を投じたい】という意見があがっていた。ボランティアは、架空の患者をつくりあげるよりも＜生身の自分を活用してほしい＞と考えており、羞恥心への配慮をされるよりも＜肌を露出する患者役を受け入れる気持ち＞を持っていた。このようなボランティアの思いを考えると、教員が患者役の状況を設定し、それに合わせて演技をしてほしいと伝えることがかえって＜患者役になる難しさ＞や＜学習に役立っているのかという不安＞を生じさせている可能性もあると考える。状況設定した患者役をボランティアがどのように演じていくか、というよりも、【患者役として自分を投じたい】という意見や【抵抗を感じる役割がある】という意見を生かし、患者設定やシナリオ作成において、ボランティア自身の体験や生活背景を取り入れた個性のある患者設定をすることが必要ではないかと考える。そうす

ることで、ボランティアは本来の自分を出しながら、自分の言葉で学生とかかわることができるようになり、演技指導を受けていないボランティアでも患者役を実践しやすくなると思われる。また、学生は、患者と看護師のリアルな人間関係のありようを疑似的に体験しながら学ぶことができると考える。このような方法で演習することで、学生は架空の人物である患者ではなく、一人の人として患者を捉えながら、より人間的関心を持ってかわることができる。そして、そのようなかわりが、いかに看護において大切であるかを学ぶことができると考える。

## 2. 地域住民（ボランティア）への効果－患者の声を反映した看護の可能性－

ボランティアの技術演習への参加動機は多様であるが、【看護師養成への貢献】や【看護教育への関心】を動機として参加している人がいることがわかった。これらのボランティアにとっては、看護大学での演習に参加し、その中で学生にアドバイスする機会を得ることが、そのニーズを満たす機会となるものと思われる。しかし、【学習に役立つ患者役になる難しさ】を感じているボランティアもいることから、これらの困難さを軽減、克服できるような教員のかかわりや演習方法の工夫によって、ボランティアの達成感はより高まるものと思われる。

また、ボランティアは、技術演習に参加することで、自分や家族の暮らし易さに役立つ【日常生活に活用できる知識の獲得】をしていた。阿部ら（2012）の研究でも、SP体験が、自己の健康に着目し、自己の生活を振り返るきっかけとなり、SPとして演習に参加することが地域住民への健康教育の機会となると報告されている。本学のボランティアにも看護技術演習に参加するための準備を行ったり、演習の中でケアを受けたりすることで、自分自身の生活をよりよくするための知識や技術を自然と身に付けられるというメリットがあると考えられる。

さらに大滝（1993）が「模擬患者という立場で、医療関係者以外の人が医療者の教育に関与すれば、非医療者の医療に対する理解が深まる」と述べているように、本研究においても、ボランティアは、看護する側の視点や看護師の役割をより深く詳細に知ることによって、看護活動への理解を深めることができていた。それにより、自分が患者になった際の看護サービスの活用方法をよりイメージできるようになっていると考え

る。Szasz と Hollenrer（1956）が提唱した医療者－患者関係モデルでは、医療者と患者との関係は1）能動－受動関係、2）指導－協力関係、3）協同作業関係の3種類に分けられる。日本の医療現場では、「指導－協力関係」が多く見られるが、最近では患者の権利が重要視されるようになり、患者がより主導的である「協同作業関係」へと変化している。しかしながら、看護師－患者関係に限定した場合はどうだろうか。患者との「協同作業関係」を築くには、患者に自分が有する権利についての情報が十分に与えられる必要がある。しかし、現在の我が国の医療現場において、患者は、本来享受できる看護ケアの内容やレベルを十分に知っていると言えるだろうか。本研究の参加者が「看護師は点滴交換を行うだけの人」と捉えていたように、診療の補助のみを行う職業だと捉えている人は少ないのではないかと考える。現在の患者は、治療や検査についてはかなりの情報を得ることができるようになった。しかし、優れた看護師の専門的知識や技術が反映されたケアによって、療養生活がいかに安心して送れ、安楽に過ごすことができるのかについては、あまり理解されておらず、看護の評価は、もっぱら「優しい」「親切」など看護師の人柄に焦点が当てられることが多い。

本学のボランティアには、看護技術演習に参加することで、看護師が行う【看護への理解の深まり】があった。それらは、技術演習中に教員が学生に対して行う、安全・安楽への配慮に関する指導を見聞きしたことによるものと推察される。ボランティアは、学生の学習場面に居合わせることで、患者として入院しているだけでは気付かない看護活動にも気付くことができる。このような看護活動を知ることは、患者が自身の療養生活をよりよく送るために、本来、看護師が行うべきことと、患者が看護師に要求できることを知ることである。これは、患者が看護師の専門的知識と技術を自分のために利用できるようになり、質の高い看護を受けるために必要な権利を主張する力をつけることにつながると思われる。そして、これらは、一般の人々が看護師や看護活動への厳しい目を持つことにつながるものであり、ひいては看護の質向上につながるものであると考える。

これらのことから、ボランティアを導入した技術演習は、学生にとって有効な教育活動であるだけでなく、地域住民にも、そして、長期的には医療における



看護の質向上にも貢献できる活動であると捉えることができる。これらの効果を広く情報提供することで、地域住民に潜在している質の高い看護ケアを受けるというニーズに応えていくことが可能になると考える。

### 3. 地域住民参加型看護技術演習における今後の展望

今回の研究では、ボランティア自身は【学習に役立つ患者役になる難しさ】を語っていた。吉川（2010）は、SPの精神的負担が、演技とフィードバックの2つのコア・スキルにあることを報告している。また、SPの負担感満足感には、SPが感じる教育への貢献度が関連していると言われている（舩形，2011）。

このようなボランティアが感じる負担感を軽減しつつ、ボランティア参加による技術演習をより充実させるためには、教員の役割は非常に重要である。教員は、学生の考えや発言を促すだけでなく、ボランティアのフィードバックを引き出したり、学生とボランティアとのディスカッションがより深まるようなファシリテーターが求められると言える（原島，2012）。現在本学の授業では、学生の援助後に意見交換の機会を設けてはいるものの、時間は十分ではない。今回の研究でも、【教育活動発展への提案】として学生との対話を求める意見がだされていた。学生、ボランティアの双方がより近い存在として、感じ考えた事を直接伝えあえる雰囲気作りや場の提供を行っていくことやファシリテーターとしての教員の指導力を上げていくことが今後の課題である。

人と人とのかかわりが希薄になっていると言われる現代社会において、自分を看護師の教育に役立てたいという思いや看護に対する期待、看護界への温かい思いに支えられて本学の地域住民参加型技術演習は成り立っている。今後は、このようなボランティアの思いに応え、学生の教育効果だけでなく、ボランティア自身にも看護技術演習に参加した満足感、意義を感じてもらえるように、さらに工夫を重ねていきたいと考える。

## V. 結論

本研究では、看護技術演習に患者役として参加した地域住民ボランティアの経験を分析し、以下の点が明らかになった。

1) ボランティアは、【看護教育への関心】【看護師

養成への貢献】【自由な時間の有効活用】【自分の健康への関心】【社会とのつながりや貢献】を参加動機として技術演習に参加していた。

2) ボランティアは、演習に参加することで【看護への理解の深まり】【日常生活に活用できる知識の獲得】【学生との交流による活性化】といった効果を実感していた。

3) ボランティアは、演習に参加して【学生はまじめでおとなしい印象】【学生のふるまいに対する違和感】【学習に役立つ患者役になる難しさ】【学生を見守り育てようとする気持ち】という思いを抱いていた。

4) ボランティアが参加する今後の技術演習については、【教育活動としての情報がほしい】【患者役として自分を投じたい】【抵抗を感じる役割がある】【教育活動発展への提案】といった意見があがった。

以上の結果から、地域住民参加型看護技術演習は、学生に対してはリアリティのある患者と人間的なふれあいのある学習経験を提供できる教育方法であると考えられた。また、参加する地域住民にとっては、看護への理解を深化させ、看護サービスを見極める目を養う機会を提供する可能性が示唆された。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、インタビューにご協力いただきました地域住民の皆様にご心より感謝申し上げます。

なお、本研究は平成24年度神戸市看護大学共同研究費（一般）の助成を受けて実施したものであり、研究の一部は、第23回日本看護学教育学会において発表した。

## 文献

- 阿部恵子（2011）. 医療者教育における模擬患者（SP）の歴史と現在の活動，看護教育，52(7)，502-509.
- 阿部オリエ，小手川良江，本田多美枝他（2012）. 看護学実習前演習に地域住民が模擬患者（simulated patient: SP）として参加することの意義に関する研究，日本赤十字九州国際看護大学紀要，11，49-58.
- 江川幸二，グレッグ美鈴，沼本教子他（2011）. 看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価：学生の感想・意見から，神戸市看護大学紀

要, 15, 59-66.

原島利恵, 渡辺美奈子, 石鍋圭子 (2012). 看護における模擬患者を活用したシミュレーション教育に関する文献検討. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 4(1), 47-56.

本田多美恵, 上村朋子 (2009). 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察: 教育の特徴および効果、課題に着目して. 日本赤十字九州国際看護大学 IRR, 7, 67-77.

大滝純司 (1993). 日本の看護教育への模擬患者導入の意義. 看護展望, 18(8), 49-51.

庄村雅子, 小島善和, 茂木陽子他 (2010). 事例演習に模擬患者 (SP) として参加する地域住民の経験. 東海大学健康科学部紀要, 16, 123-124.

鈴木玲子, 高橋博美, 常盤文枝他 (2002). コミュニケーション学習に SP (Simulated Patient) を取り入れた教育技法の開発. 埼玉県立大学紀要, 4, 19-26.

Szasz, T.S. and Hollender, M.H (1956): A contribution to the philosophy of medicine: The basic models of the doctor-patient relationship, Arch. Int. Med. 97: 585-592.

舩形尚, 清水裕子, 岡田宏基他 (2011). 模擬患者 (SP) による医療面接ストレスの検討, 医学教育, 42, 102.

吉川洋子, 田原和美, 松本玄智江 (2010). 看護教育における模擬患者研修の成果と課題, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 4, 91-99.